東日本大震災と先人の智恵

平和主義という理想
――内村鑑三の国家観――

高倉　克也

内村鑑三

キリスト教思想家として名高い内村鑑三（1861－1930）は札幌農学校時代に洗礼を受け、アメリカ留学から帰国後、教員や新聞記者をしながら、権威・儀礼を排した聖書研究を基調とする独自の無教会主義を唱えた。数多くの著作を遺し、岩波書店から全40巻の『内村鑑三全集』が出版されている。

天譴論の社会的背景

大正12年（1923）9月1日、関東大震災に遭遇した内村はいわゆる天譴論（てんけんろん）の主張者として知られている。天譴論とは簡単にいうと震災＝天罰と見做す考えかただ。いうまでもなくこれは被災者をないがしろにした根拠のない暴論にほかならない。だが内村はなぜこんな発言をしたのか。

震災直後の日記から引用しよう。

「東京は一日にして、日本国の首府たるの栄養を奪われたのである。天使が剣を提（ひっさ）げて、裁（さばき）判を全市の上におこのうたように感ずる。しかし、これは恩恵（めぐみ）の裁判であると信ずる」（９月５日）

「低い快楽と虚栄とを追い求めて、三百万の民が東京埠頭、隅田川河口の一地点に集合した事が、この災禍の因をなしたのである。神は村落を造り、人は都会を造る。虚栄の街たる都会の無き所に、いかなる天災といえども、過大の損害を生ずることはできない。その意味において、今回の天災は確かに天譴である」（９月21日）

こうした主張は内村だけではなく実業家の渋沢栄一や作家の生田長江らも公言していた。最近では石原慎太郎東京都知事による東日本大震災後の津波＝天罰発言が物議を醸している。

内村らによる天譴論は大正デモクラシーあるいは大正モダニズムと呼ばれる大衆消費社会の出現を背景としていた。工業の発展に伴い多くの近代的な企業や商品が生まれ、活発な消費行動によって都市は急速に膨張した。しかしその一方で貧富の差が広がり、とりわけ農村部は都市の繁栄から見放された形で困窮した。農村出身者の多い軍部が昭和の軍国主義へと暴走するようになった要因として都市と農村の根深い相克を見過ごすことはできない。

東京を「虚栄の街」と断罪した内村の天譴論はこうした世相を反映し、宗教的な観点による都市＝大衆消費社会批判を意味していたといっていいだろう。それは信仰と農業に基づく平和国家論を読み解くとより明白になる。

デンマークから学ぶ

内村は明治44年（1911）に「デンマルク国の話」と題する講演を行い、２年後に小冊子として発行した。副題は「信仰と樹木とをもって国を救いし話」となっている。

北欧の小国であるデンマークは19世紀にプロイセン王国との戦争によって肥沃な南部の２州を失い、未曾有の経済的危機に陥った。しかし不毛の荒野への植林に成功し、小さいながらも豊かで平和な酪農国に生まれ変わった。内村はこのエピソードを紹介して「兵を用いず侵略を事とせず、樹木と信仰とをもって一国を救いし美談なり」と称賛している。

かつて日清戦争（1894－95）を「義戦」として支持した内村は戦後それが「欲の戦争」だったと痛感して平和主義に転じ、日露戦争（1904－05）に際して積極的な非戦論を展開した。それは戦争反対を唱えるだけではなく平和主義による新たな国の道筋も示していた。

1904年の「戦時における非戦主義者の態度」という論文で内村は次のように述べている。

「平和主義とは言うまでもなく戦わないということ計りではありません。前にも述べました通り非戦は僅かにその消極的一面であります。平和主義の積極的半面は殖産であります。家庭の幸福、山林の栽培、鳥類の保護、河川の利用、土壌の増肥等、その他すべて平民の生涯を幸福ならしむことであります」

平和主義の積極的半面は殖産であり、すべて平民の生涯を幸福ならしむことであるという内村は「米国物質主義の恐怖」を説き、近代工業化社会＝大衆消費社会に必然的につきまとう公害問題にも強い関心を示していた。デンマークを理想像とする内村の思想的根底には軍事大国路線と対極の平和的な小国主義が根づいており、関東大震災後はますますその志向性が高まっていく。

農業による平和的文明へ

内村は関東大震災の翌年、国民新聞に「西洋の模範国デンマルクに就て」を寄稿する。内村が震災後の東京を「デンマルク国の話」で取り上げた敗戦後のデンマークに重ねあわせていたことは容易に想像できる。

「日本人は今日まで小国と称してこの国を侮ってきた。これ我等にとり大いなる恥辱である。今に至りて目覚めて、大いにこの西洋の模範国より学ぶべきである」

それでは内村が小国のあるべき姿として称揚したデンマークから学ぶべきものとは何か。

「日本は元来農本国である。今より大いにデンマルク国に学んで、農をもって強大なる平和的文明国家たるべきである」

農業を基軸とする平和的文明国家の建設が内村の想い描いた震災復興への理想の道のりだった。それは大量生産・大量消費・大量廃棄を必然的に生じさせる西欧的近代文明社会へのアンチテーゼと見做してもいいだろう。内村はデンマークだけでなく日露戦争の直前に発表した「余の理想の国」でスイス、ベルギー、オランダ、ノルウェーなども「これらはみな剣をもちいずして、農と工と商とをもって世界に覇たるの国である」と高く評価していた。

平和的な小国主義それ自体は内村の専売特許ではなく、自由民権運動の思想家である中江兆民なども早くから主張していた。ただ理想とすべき国家像を具体的に示した点で内村の論旨はより明快だった。

内村の死後、日本は軍事大国への道を突き進み、第2次世界大戦による膨大な犠牲をもたらした。戦後は経済大国として復活したものの、内村の指摘する「物質主義」の蔓延によってさまざまな社会的弊害が生じている。何よりも東日本大震災では原発の安全神話が一瞬にして崩れ去るなど近代科学技術文明の危うさを浮き彫りした。

むろん内村の主張には天譴論に典型的なように独善主義的な問題点も少なくない。しかし内村が掲げた理想の灯は現代社会の行方を探るひとつの道標として想起されていいだろう。